め、その周圍に他の七奇蹟を縮少して現はしてある。然しその何れに於ても、常に、同樣の象徴的内容が見られるのである。

元來の四大奇蹟で、殊に降誕の現はし方を調べて見れば、その考の中に極めて不思議な點を見る。犍陀羅の緣取りに中印度の舊い蓮花を取るのが已に意外であるが、之をコリント式の小柱の間に現はしてゐる。蓋し、西北方にある遺物では、之が餘程重要でなくなつてゐても、その意味だけは十分に保存した事は明かなのを知るのである。實際、ギリシア風佛敎の降誕の圖は、殆んど全く跡を絕つてはゐるが、その理由は簡單で、降誕を直接現はすに至つてゐるのであるから、其の象徴を以てするにも及ばないのである。(挿圖第六、並甲、第一五二圖以下又は乙、附圖第三及四、但し、誕生佛の足跡には時に蓮花がある。)然しベナレスの笈多式板彫まで降つて、紀元後四五世紀のものでは、(甲、二〇九、及び五〇七圖。又は、乙、附圖、第四ノ三圖。)主要題材は大體犍陀羅式の型に則つてゐるが、二龍象が二水瓶を以て誕生佛に灌水してゐるもので、降誕と七歩と灌水とを組合せてゐる中に、蓮花が誕生佛の足跡に丁度規則正しく現